

広報委員会 (第23期第4回) 議事要旨

1. 日 時 平成28年7月1日(金) 14:00～16:20
2. 場 所 日本学術会議 2階 大会議室
3. 出席者 小松 久男委員長、那須 民江副委員長(スカイプ出席)、渡辺 美代子幹事、佐藤 岩夫委員、嶋田 透委員、笠原 忠委員、荻原 一郎委員、山崎 典子委員(スカイプ出席)
日本学術会議事務局：小林課長、坂上、笹川、信澤
参考人：田中里沙(株式会社宣伝会議取締役 メディア・情報統括)、吉川日本学術協力財団会長、廣渡同副会長、黒川同理事長、谷口同常務理事、末次、秋山弘子新編集委員会委員、石田寛人同委員、大竹暁同委員、狩野光伸同委員、島藺進同委員、武市正人同委員、安成哲三同委員

【配布資料】

- 資料1 出席者一覧
- 資料2 広報委員会(第3回) 議事要旨(案)
- 資料3 「学術の動向」特集記事企画案

- 参考1 『学術の動向』平成28年8月号以降の特集等掲載記事一覧
- 参考2 日本学術会議の今後の展望について(広報関係抜粋)
- 参考3 日本学術会議第23期1年目(平成26年10月～平成27年9月)の活動状況に関する評価
- 参考4 『学術の動向』への編集協力及び事務局が実施する広報活動について
- 参考5 日経アジアレビュー掲載記事
(「学術の動向」平成28年4月号近藤道雄先生の記事の英訳版)

議 事

- (1) 前回議事要旨案の確認
特段の修正意見がでなかったため、標記議事要旨を確定することとした。
- (2) 『学術の動向』の編集について
これまで広報委員会は、編集協力として「学術の動向」の編集委員会と兼

務する形で活動してきたが、日本学術協力財団（以下、「財団」という。）が推薦する委員を加えた大幅な変更を伴う新たな形の編集委員会に改編したいとの提案がなされたため、広報委員会を一旦中断し、新たな編集委員会についての説明を財団から聴取することとなった。

【編集委員会開催のため、一旦広報委員会を中断】

※ 編集委員会の議事の詳細については、同委員会事務局として財団が事務処理を行うため省略するが、次のような点について審議された。

① 編集委員会立ち上げについて

新たな「学術の動向」編集委員会の立ち上げに関する経緯、趣旨及び規定の説明を行い、了承。吉川会長より新たな編集委員会の委員長を小松委員、副委員長を大竹委員、那須委員、渡辺（美）委員とする提案があり、了承。

② 「学術の動向」の今後のあり方について

冒頭、田中参考人より「学術の動向」のリニューアルについて当日配布された資料に基づき説明。続いて、委員間で下記の点について、意見交換。

i) 「動向」リニューアルの目的、ii) 「動向」の存在意義、iii) 対象読者、iv) 記事の内容（従来のシンポジウムを基にした特集、編集委員会企画の特集記事導入、サイエンスカフェに関する記事掲載、提出のあった企画案等）、v) 電子ジャーナル化（誌面のオンライン化、J-STAGE での閲覧方法の工夫）、vi) 会員・連携会員への協力依頼・周知等

③ 次回開催について

9月の初旬で日程調整。特集企画やコーナーに関する案を持ち寄り、全体構成を見据えたコンテンツを審議予定。

【広報委員会を再開（参考人は谷口氏、末次氏を除き退席）】

(3) 今期の広報活動について

「学術の動向」の編集に関する今後の実務の進め方について意見交換を行った。主な発言内容は以下のとおり。

- ・ 10月の総会で「学術の動向」に対する理解を会員等に高めてもらえるように発言の機会を設けたいと考えている。
- ・ 「学術の動向」に対する Web アンケートの実施も考えられる。
- ・ 今後メール審議が必要となってくる場合が想定されることから、編集委員

会の委員全員のメーリングリストが必要と考えられる、財団には対応を願いたい。

- ・ 日本学術会議としての合意が必要なのではないか。幹事会で意見を聞くべきと考える。電子媒体への移行の意見も出ていたが、紙媒体を続ける必要もあると思う。
- ・ 会員・連携会員への購読を促すことを第一目標と考え、次に大学教員等を購読者とし範囲を拡大して取り込むことを現実的な目標とすべきではないか。一足飛びに一般販売へと議論が進んで飛躍が大きい、現実的な対応を取る必要がある。
- ・ 広報委員会と編集委員会との位置づけが不明確になったように感じる。書店販売されるような雑誌の編集に、広報委員会委員が全面協力することは疑問である。
→ 広報委員会は「『学術の動向』の編集」について協力することとなるが、それ以外の日本学術会議の広報全体に係ることを話し合う場である。
- ・ 会員・連携会員を確実に読者層として捉え、それから読者を少しずつ広げていくので、一般販売の雑誌は軌道に乗ってきた将来的な話と考えてもらえればと思う。
- ・ オンラインでアクセスしてもらえば、社会に利用してもらえる。書店への流通ルートを確保するのは大変なこと。科学コミュニティの雑誌としての性格は変わらないが、閉じこもった雑誌とする必要はない。
→ (財団) 財団では「学術の動向」のHPの改修、コンテンツの充実を考えている。
- ・ 学術会議が発出する提言と同じく、誰を読者にするかが重要。科学者と一般社会の両方を相手とする企画を組み入れていく必要がある。

以上